



妖怪退治

11月6日

Sudden Fiction Project

高階經啓
hirotakashina

11月6日のおはなし「妖怪退治」

妖怪が出て困るとしきりに友人がこぼすので、様子を見に行くことにした。

妖怪が出る所というのは得てして狭苦しくて、陰気だったり、湿気が多かったり、やけに寒い風が吹いていたりするものなのだが、着いてみればさして特徴のない土地柄だった。とりたててどうということのない住宅街で、だらだらと長い坂の途中にあって、建物が面している公道の道幅も広いし、まわりの建物も3階より高いものもなく、昼間なら日当たりも良さそうだし、これが家探しをしている立場ならいい物件を見つけた、ここに住んでもいいと言いたくなるような、思わず不動産屋を契約を交わしてしまいそうな、つまりむしろ感じのいい土地だった。

まさにそれさ、と建物の外にある階段を二階に上がってすぐのドアの鍵を開けながら、友人は苦笑いを浮かべる。おれもここはいいと思ったんだ。外見も良かったし、中に入った感じも良かったし、だいたい間取りがどんぴしゃだったんだ。ここに来るまでは思いつきもしなかったような間取りなんだが、いったんこれを見てしまうと、うちの家族のために用意されたと思えないような完璧な間取りだったんだ。

それこそが罠だったのかも知れない、と思うが、口には出さない。うまそうな餌をつけた釣り糸が垂らされていたのかも知れない。友人はそれに食いついてしまい、場合によっちゃわたしだって食いついていたかも知れないと思う。それでどんな妖怪が出るのかと聞くと友人はほとほと困った顔つきで、いやそれがはっきりしないんだと言う。妙なことを言うと思って、はっきりしないとはどういうことだと問いかけると、いろいろ不思議なことは確かにあるが、妖怪がどうこういうような事件はないという返事だ。

それはおかしい、妖怪が出て困ると言うから来たのではないかと言いかけてはたと気づく。そして用心深く見守ると、友人の顔がどうもはっきり見えない。目の焦点が合わないようにぼんやりとしているのだが、服はきちんと見えるので、目のせいではなく顔のせいだとわかる。あんまりじっと見ていたものだから、どうした、何かついているかと聞かれてしまった。あわてて何でもないと答えたものの、こちらがうすうす気づいていることに勘づかれたかも知れない。

不意にみしみしと音がして、地震でも来るのかと身構えるがそうではない。納戸のドアが勝手に開いて中からわたしの腰高ほどもある巨大な眼球がひとつ出てきてこちらを見つめる。友人はと見ると、それには気づかない様子でちょうど隣のキッチンへ行って行くところだった。わたしも何食わぬ顔で友人の後を追うが、いきなり壁に阻まれる。友人が通ったはずの通路がなくなっている。壁を手探りするわたしを大きな目玉がじっと見ている。あまり心地のいいものではない。

他に通路はないかと探すが、あとは窓くらいしかない。二階なので窓から出るわけに行かないが、他に開口部がないので、とりあえず窓を開けようとするが、窓の外に髪の長い女が立っているのに気づきぞっとする。もちろんそこにはバルコニーがあるわけではない。外には何もないただの窓だ。二階だから、そんな風に人がいるはずがない。

さすがに手を打たなくてはなるまい、というので、わたしはリュックサックから瓶を取りだし、わずかに蓋を開ける。するとまず目玉が吸い込まれ、次に窓の外に女が吸い込まれる。本当はいちばん怪しいのは友人の姿をしたあの男なので、その本体をおさえたかったのだが、やむを得ない。思いがけない収穫として壁の振りをして通路を塞いでいた何者かも吸い込むことができた。ぬり壁か何かだったのだろう。

その通路を通過して友人が入ってくる。どうしたんだ、なかなか来ないからびっくりするじゃないか。けれど友人は瓶に吸い込まれることもない。じっと見るが顔は輪郭も造作もはっきりと見える。上手に化けたのかも知れないが、瓶に吸い込まれないところを見ると本物かも知れない。何だいそれは、と友人が問いかける。ああそれが例の、妖怪を退治する道具かい？ ああその通

りだ。これがそれだ。捕まえた妖怪を飼い慣らしてしまうっていうのも本当かい？ その通りだ。なんなら飼い慣らしたところでおまえに進呈しようか。いやいや、そんなものはいらぬ。むしろその瓶の方が欲しいな。こいつは商売道具だ、譲るわけにはいかない。で、それ、いったい何て名前だ？ これかい、ペットボトルさ。なんだって？ 妖怪を飼い慣らしてペットに、ね。

(「ペットボトル」 ordered by sachiko-san/text by TAKASHINA, Tsunehiro a.k.a.hiro)

感謝の言葉と、お願い&お誘い

Sudden Fiction Project（以下SFP）作品を読んでいただきありがとうございます。お楽しみいただけましたでしょうか？ もしも気に入っていただけたらぜひ「コメントする」のボタンをクリックして、コメントをお寄せください。ブログへの登録（無料）が必要になりますが、この機会にぜひ。

「気に入ったけどコメントを書くのは面倒だ」と言うそのあなた。それでは、ぜひ「ツイートする（Twitter）」「いいね！（Facebook）」あたりをご利用ください。あるいは、mixi、はてな等の外部連携で「気に入ったよ！」とアピールしていただくと大変ありがたいです。盛り上がります。

※星5つで、お気に入り度を示すこともできますようですが、面と向かって星をつけるのはひよっとしたら難しいかも知れませんね。すごく気に入ったら星5つつける、くらいの感じでご利用いただければ幸いです。

現在、連日作品を発表中です。2011年7月1日から2012年6月30日までの366日（2012年はうるう年）に対して、毎日「1日1篇のSFP作品がある」という状態をめざし、全作品を無料で大公開しています。→[公開中の作品一覧](#)

SFP作品は、元作品のクレジットをきちんと表記していただければ、転載や朗読などの上演、劇団の稽古場でのテキスト、舞台化や映像化などにも自由にご活用いただけます。詳しくは「[Sudden Fiction Project Guide](#)」というガイドブックにまとめておきました。使用時には、コメント欄で結構ですので一声おかけくださいね。

ちょっと楽屋話をすると、7月1日にこのプロジェクトを開始して以来、日を追うごとにつくづく思い知らされているのですが、これ、かなり大変なんです（笑）。毎日1篇、作品に手を入れてアップして、告知して、[Facebookページ](#)などに整理して……って、始める前に予想していたよりも遥かに手間がかかるんですね。みなさんからのコメント、ツイート（RT）、「いいね！」を励みにがんばっていますので、ぜひご協力お願いいたします。

読んでくださる方が増えるというのもとても嬉しい元気の素なので、気に入った作品を人に紹介して広めていただけるのも大歓迎です。上記Facebookページも、徐々に充実させてまいりますので、興味のある方はリンク先を訪れて、ページそのものに対して「いいね！」ボタンを押してご参加ください。

10月からは「1日1篇新作発表」の荒行（笑）を開始し、55作品ばかり書き上げる予定です。「[急募！お題 この秋Sudden Fiction Project開催します](#)」のコメント欄を使って、読者のみなさんからのお題を募集中です。自分の出したお題でおはなしがひとつ生まれるのって、ぼくも体験済みですが、かなり楽しいですよ！ はじめての方も、どうぞ気軽に遠慮なくご注文ください（お題は頂戴しても、お代は頂戴しないシステムでやっています。ご安心を）。

こんな調子で、2012年6月30日まで怒濤で突き進みます。他にはあんまりない、オンラインならではの風変わりな私設イベントです。ぜひ一緒に盛り上がってまいりましょう。

妖怪退治[SFP0129]

<http://p.booklog.jp/book/37495>

著者 : hirotakashina

著者プロフィール : <http://p.booklog.jp/users/hirotakashina/profile>

感想はこちらのコメントへ

<http://p.booklog.jp/book/37495>

ブックログのpapier本棚へ入れる

<http://booklog.jp/puboo/book/37495>

公開中のSudden Fiction Project作品一覧

<http://p.booklog.jp/users/hirotakashina>

電子書籍プラットフォーム : ブックログのpapier (<http://p.booklog.jp/>)

運営会社 : 株式会社paperboy&co.